

高齢者のテレビ視聴行動に関する事例研究

八巻睦子（お茶の水女大・院）

目的 わが国において、現在テレビ視聴時間をもっとも長いのは60代以上の高齢者である。高齢者のテレビ視聴行動については、これまでの研究成果から視聴行動の類型と属性の関連について一定の見解がとられてきたが、個別具体的な生活状況の下ではたして高齢者がどのような意識を持ってテレビを利用しているのかという問題については考察がなされてこなかった。そこで、本研究では高齢者の日常生活におけるテレビ利用の様態を聞き取りによって質的に明らかにすることを目的とした。

方法 60歳以上の高齢者40名（民間非営利団体会員、軽費老人ホームB型入居者、千葉県我孫子市在住者）を対象とした面接聞き取り調査。期間は1997年6-10月

結果 高齢者全体にみられる視聴行動としては、①朝のテレビ視聴、テレビを見ながらの食事②家庭団らんの場におけるテレビの重要性が支持されていた。とくに、①朝のテレビ視聴に関しては「時計代わり」という表現が象徴するようテレビがついていてもしっかりと見られていない。②に関しては、各対象者の居宅におけるテレビの配置からテレビの重要性が明らかとなった。

視聴行動をタイプ別に検討した場合、テレビを「みるもの」として意識化する<意味化>、「みえるもの」として無意識化する<環境化>の2方向に分化していた。<意味化><環境化>双方を併用する中間層においては、「テレビへの愛着」「テレビへの無関心」「テレビとラジオの使い分け」の3類型が析出された。さらに、一部の独居高齢者には孤独を紛らわすためという目的でテレビの「内容」ではなくテレビから発する「音」を求めてテレビをつけるという特徴がみられた。